

老舗の街・尾張町シリーズ1

加賀国 尾張町

尾張町通り歩道・街路灯完成記念誌

目 次

趣 旨	1
歴 史 (金沢の発祥地・山崎窪市から尾張町へ)	2
町並の変遷 (懸作とともに)	4
ビジョンへ向けて	6

尾張町ビジョンの創造へ向けて

趣旨

尾張町は、金沢へ前田利家公が入城して出来た商人の街であります。以来、お城や浅野川、卯辰山、近江町市場と接する源流点として金沢の商工業を今日まで栄えさせて参りました。

そこには経世済民としての心の「ふれあい」を通じて、時代の変遷に敏感に対応し、伝統からの新しい創造を行い続けて来た老舗のたくましが脈々と流れています。

この町に生まれ育ってきた私達は今、21世紀を間近に控え、激変する社会的・経済的・政治的状況を見通し、何が時代を創造的進化させて行く源であるのかを、自らに問い質さなければいけない時に来ております。

特に情報化の波の速さは特筆すべき事柄であります。老舗の街・尾張町が現在まで連綿として続いて来られたのも、先人達が現状に甘んじることなく、常に時代の情報を先取りし、お客様のための街創りを進める気概があったればこそと信じております。

この努力の賜物で創り上げてきた価値に感謝をすると共に、さらに未来へ向かって尾張町商店街振興組合の発展を願う者として、尾張町の将来ビジョンの作成は不可欠のものです。

コンベンション都市として、日本から世界へと開かれた町として発展しようという金沢市の、個性ある中心商店街尾張町の活性化はこれによって始まり、又周辺町会の発展も創造されて行くものと思われれます。

今に生きる私達の新しい伝統の創造は、必ずや未来の遺産として指針になることと信じつつ以下検討を加えて参ります。

歴史

未来は過去の実績の上に初めて成り立つものです。我が町尾張町について、ここでは少し詳しく振り返ってみましょう。【浅香年木著「金沢城と城下町金沢の前史」(喜内敏編「金沢城と前田氏領内の諸城」)より】

城下町金沢の片鱗が初めて歴史の中で具象化されるのは、正和元年(1312年)に遡ります。

白山宮加賀馬場本宮の「三宮古記」所蔵の正和元年三社臨時祭用途注文の中に、白山宮水引神人沙汰人得分として「山崎凹市紺…」と記されている山崎窪市が、それに相当すると考えられています。

この山崎窪市の現在の位置についてはいろいろ言われておりますが、石川郡窪村(金沢市窪町)説と、金沢城下中心部北寄りの久保市分＝尾張町・新町・中町(金沢市尾張町)説が有力であります。中でも山崎村を小立野台地付近と比定するのが一般論となっています。

事実小立野台地先端部北東麓の、現在久保市乙剣宮が位置する浅野川中流(左)岸の橋場町・尾張町付近は、浅野川の河岸段丘の低部をなし、標高が16.7メートルにすぎず、旧金沢城下では最も低い凹地であり、「窪市」「凹市」の名にふさわしいと考えられているからです。

水引(麻糸)神人は、白山宮加賀馬場本宮を本所とする紺掻座であり、能登の南端部から北加賀全域及び加賀北半部の紺布の供給を独占していました。

そしてこの山崎窪市居住の紺掻は、浅野川と佐井川(犀川)に挟まれた地域を商圏とし、下流域では粟咲川(背崎川＝大野川)を境に、宮腰・大野(金石＝大野地区)にまで及んでいました。

これは、後に城下町金沢の中枢部となる地域の紺布が中世後期初頭に於いて山崎窪市に事実上独占されていたことを示すものです。

白山本宮の流通経済の掌握は紺掻の支配にとどまらず、油商人や酒屋を掌握しており、当然山崎窪市にも同流通に関する商人の居住があったはずであり、後の城下町金沢の主要部の小規模な商業圏の核であったと思われます。

ただ中世後期にあっては、北加賀の流通幹線は砺波丘陵の山麓線から手取川デルタ地帯を結ぶ幹線と、大野庄湊(大野湊)から白山宮加賀馬場本宮を結ぶ幹線の交差点(今の野々市町本町押野町)が最も主要な商圈でありました。南北朝内乱期には、ここに守護所を構えた富樫氏がその支配権を持つに至る訳です。従ってこの時期には、山崎窪市の役割は幹線交差点から外れた1つの中継点にとどまっていたというのが状況です。

やがて中世後期の一向一揆の勃発とともに山崎窪市の位置付けは大きく変わって来ます。長享二年(1488年)の「長享の一揆」により、守護領国制が解体させられ、北加賀の流通経路の様相も徐々に変化して参ります。

特に一揆の中核をなし、加賀一国の自主管理体制を実質的に指導する立場にあった若松本泉寺・波佐谷松岡寺の支柱であった本泉寺が、文明十九年(1487年)に二俣から浅野川中流右(北)岸に移ることにより、山崎窪市との距離が急速に接近して来ます。

その若松本泉寺の膝下には、金沢坊の寺内町金沢に先行して寺内町若松が形成されておりました。この寺内町若松により、先の幹線交差点を凌駕する新たな十字路交差点が形成され、山崎窪市は加賀一国を単位とする商圈へと成長して行くのです。

寺内町若松は、享祿四年(1531年)の「享祿の錯乱」によって本泉寺とともに炎上してしまいましたが、新たに本願寺の支坊として周知の金沢坊が建設されます。ここに支坊が選ばれた理由には、低丘陵とはいえ2つの河川に挟まれた大地は一応の防塞条件を踏まえ、かつ参詣に不便なほどの高山でもないこと、そして最大の理由は当時成長しつつあった山崎窪市があったことに違いありません。金沢坊はその成立過程から中世後期の庄郷単位の国役ではなく、庄郷単位を破棄して郡組単位に賦課するという近世的性格の国役によって築造されておりました。

この中世的な枠組を破棄することにより、新設の本願寺支坊が、既存の領域名に因む「山崎坊」「田上坊」ないし「石浦坊」を称さず、小立野台地先端部の狭隘な小地名であった「金洗沢」または「金掘沢」に由来する「金沢」と坊号に採用したの

もうなづけます。なお、金沢坊は「尾山御坊」とも別称されています。

金沢坊は、天正八年の夏に織田信長の侵攻を受けて陥落し、佐久間盛政の占領下に置かれます。

三年後の天正十一年、滅亡した佐久間盛政の後を加増された前田利家が金沢坊から金沢城への改造・拡張を急いで行くこととなります。ただ城地と城下町の選択が、金沢坊と寺内町金沢の既存の発展形態に制約されざるを得なかったことに、城下町金沢の特殊性がうかがわれます。

前田利家にとって残された主要な課題は、旧領ないしは上方からの商人・職人の招致や、領内に散在する多くの商人・職人を集めることであったといえます。ここに尾張の国名古屋商人の町、尾張町の発祥が先の山崎窪市の活況を引き継いで歴史の舞台に登場して来る訳です。以降、尾張町は藩政時代より金沢の中心地として栄えて行き、その商業活力は文化をも生成させて行くこととなります。

町並の変遷

加賀藩主の参勤交替は、通常大手門より出発し、藩祖の率いて来た町人達の尾張町通りに出、右折して橋場町から北陸道へ抜けて行くことを慣例としていました。この為大店の並ぶ尾張町通りでも、藩主の通る下尾張町の商人は特に店構えに気を配っていたとされています。又当時の商人は実績による許認可制でもあり、藩主の方でも加賀藩の表看板たる商人町故、特に厳選した店しか誘致しなかったようです。

一方、江戸初期から上期にかけて、橋場町界限(旧「懸作」)に掛作りの仮屋を設けて商売するものが出て参ります。これ等は古着を掛ける(今の貸衣装屋)商売であり、特に男子の礼装を主体とし、武士にとっては登城衣装や参勤交替の衣装を、町民にとっては祝祭日の晴着にと利用されたようです。当時の商店は店内に入って商談することが一般的で、表通りより店内を見せる風習がなかったのに対し、こうした商売の性格上表通りより見えるようにしてありました。ために武士・町人の別を問わず人々は通りを往来し易くなり、尾張町周辺の活

況は江戸時代を通じてますます盛んになって行きます。

この活況は新しい様相を帯びながら、明治時代へとたくましく引き継がれます。明治6年の太政官達により、全国主要街道の県庁所在地の交通要所に木柱を建て、この場所を管内諸道の起点即ち元標と定めるとのことで、「石川県里程元標...加賀国金沢尾張町」もまさしく金沢の最も繁華な実績を持つ尾張町に建てられたことでも頷ける訳です。

『野々市へ一里三十一町二十四間、南森下へ一里二十五町三十間』という私達は馴染みの案内にもある如く、商業経済の起点としての地歩は確実なものとなって行きます。

明治政府は又、西洋列強諸国に追いつかんとして富国強兵策を推進している時期でもありました。明治21年の石川県下商工便覧の中の西洋小問物商・河合屋の絵を見ますと、石川県里程元標の木柱に並び「名古屋鎮台...六十六里十六丁・豊橋營所...八十四里十八丁」という木柱が描かれているのを見ても分るように、金沢城の中に駐留した陸軍によって軍事都市化されつつあったことも明瞭に理解されます。

下尾張町も上尾張町もその頃には区別なく軍需に対応して発展して行くようになります。尚、城内には歩兵第7連隊だけでなく、第9師団本部もあったため、北陸最大の陸軍規模を誇り、軍務に就いている人に面会する家族も多く集まり、近隣町会もその恩恵を受けて賑わっていました。

やがて、明治31年金沢駅が出来、日露戦争が始まると共に従来前田藩の台所として活況を呈していた、青草辻市場近江町のある武蔵から駅前へ徐々に人が流れるようになります。

さらに時代が下り、第2次大戦後の昭和24年、国立大学設置法の公布により、城内に金沢大学が設置されてお城との商業関係が薄くなる一方、近代化を推進し続ける片町・香林坊に人々は目先を求めて流れ出して行くようになります。

人情を尊び、老舗の威風を誇り、蓄積された文化の薫りすら漂う尾張町の味わい深さは、どうしても派手さに欠ける為若干の淋しさに見舞われることとなります。しかし根本的な部分で時代を先取りし、常に人々の心の「ふれあい」を

創り上げて来た事実を、今こそ見直すべき時ではないかとここに考えるものです。【尾張町：松田平四郎談より】

ビジョンへ向けて

尾張町の発展は、明治初期では東京・大阪・京都について4番目の都市であった城下町金沢の繁栄と切り離せるものではありません。

明治維新の折、前田公が金沢城を明け渡してから、陸軍の管轄となり、その後金沢四高を母胎とする金沢大学の時期が長く続いておりました。今このシンボルの金沢城は、その管轄主体の金沢大学が市内角間地区への総合移転を迎えており、これからの在りかたに大きな課題を内外に投げかけている昨今です。

歴史をひも解いてみても、一向一揆に拘わる特殊な城の成立過程から、天主閣の存在も明確に立証されていない状態の城であります。お城とともに歩んできた尾張町としては、金沢城跡地の利用に何かシンボルを得、本来表門であった大手門のこちら側をさらに活況を呈する様にしたいと願う訳です。

今年(1986年)は、道路のロードダウンとカラー歩道・街路灯が完成し、又石川県より町民文化館の尾張町商店街振興組合への民間運営移管も行われ、尾張町商店街が新しい時代へ向かって大きく動き出そうとしている時を迎え、私達の活動方向をビジョンにしたいと考えます。

金沢市全体のことをみても、単に1地域の活況だけでは点にすぎません。隠し出城・忍者寺があり、近代的な片町・香林坊があり、名勝・兼六園があり、老舗の街・尾張町があるというように、個性ある点と点が結びあって線になり、面が形成されて行ってこそ有機的な人の流れが形成され、コンベンション都市としての機能が総合的に生きてくるはずなのです。

そしてコンベンション都市金沢の評価は、人々の心の琴線に響く尾張町を1つの基点として認められるであろうことを願うものです。

1986年11月発行

尾張町商店街振興組合

理事長 向田 武吉

尾張町若手会

会長 石野 琇一

金沢市尾張町一丁目11番8号